相州鎌倉 建長寺と 信州上田別所安楽寺との関係年表

西暦	日本年号	南宋年号	説明	典書
一二四四	寛元二？	淳祐四	◎十六才の春、京に上り、圓爾辨圓に見ゆ。事後翌年にか、渡海入宋とみる。？	天童寺埼名等
一二四六	寛元四	淳祐六	◎一説曰、来迎院主、月翁智鏡、在宋求法中、蘭渓道隆と道交あり、渡日の志、又、廬山の帰宗寺土地神（祠山大帝）の夢に日本有縁の意、再三に及ぶと伝える。◎春暮（樵谷惟僊と同船、義翁紹仁、竜江心宣を伴い、博多に来航、博多円覚寺に寓居す。◎博多円覚寺に於て、冬（十一月）、永平寺道元宛に書を呈す。（道元の弟子詮慧・慧達、博多に於てその書を敬領す）	大覚禅師録 空華日用工夫略集 永徳寺寺宝の系・建撕記
一二四七	宝治元年	淳祐七	◎京に上り、泉涌寺来迎院に仮寓す（三十四歳）。樵谷も同道か？ △道元、歳冬（十月）博多円覚寺蘭渓道隆の机前に返書す。	建撕記・空華集・禅家
一二四八	宝治二年	淳祐八年	◎十二月、鎌倉寿福寺に掛搭し、次いで北條時頼の招請にて、常楽寺に入る。	開山蘭渓和尚行状・大覚禅師録
一二四九	建長元年	淳祐九	◎六月、東福寺圓爾辨圓、心地覚心（六年）に建長寺建立後の、僧衆指導、修行の助縁を請う。◎十月、帰国を報じる。（日、仙郷人便帰）	聞渓隆尺牘・圓爾尺牘
一二五一	建長三	淳祐十一	△無関普門、杭州霊隠寺・浄慈寺断橋妙倫に参ず。 △無本覚心、寧波阿育王寺に掛搭し、実朝の遺骨・等身観音像を西院に安置す。	大明国浙江状・法華山聞禅師之縁起
一二五三	建長五	宝祐元年	△九月、無本覚心、明州大梅山、次いで杭州護国寺無門慧開に参ず。◎十一月二十五日、建長寺竣工落慶供養、僧堂内規則を定める。 △永平寺道元示寂（寿五十四）	法華山聞禅師之縁起・建長国禅寺疏文・大覚禅師録
一二五四	建長六	宝祐二	△無象静照、石溪心月の座下に在り。 △堰渓広聞、杭州霊隠寺四十世に晋住す。	建長寺史・禅学大辞典
一二五五	建長七	宝祐三	◎建長末、第二次入宋求法とみる。？（佛鑑禅師録曰く、大覚禅師録曰と）又、（宝覚禅師語曰く、寶の宋遊、宋～後宋寶の別し嘱禅高の輪下に参ず嘱に蒙詞を授ず） △三月望、一条實経血族、法華経三十二巻を径山下院正続院に納経す。（日本国丞相藤原公捨経記）を天童寺元西厳了恵撰述す。	佛鑑禅師録・本朝高僧伝・東福寺誌
一二五六	建長八 康元元年（十月宝治改元）	宝祐四年	◎春頃か、第二次入宋求法とみる？。◎七月、北條時頼最明寺建立、蘭渓道隆を招請して開堂す。 △天童寺焼失、西厳了恵、幻智菴に退休、別山祖智、西洞庭山より特請、天童四十世晋住、再興に努む。◎その会下に参ずとみる。	本朝高僧伝・空華集十九 天童寺志・巻三（元寶等）
一二五八	正嘉二	宝祐六	△別山祖智、一鉢一嚢を携え来寺、茅を縛り居し、天童寺を三年間で殿宇宝閣を復興す。◎求法の傍ら、天童寺の再建を見聞荷担するとみる。◎三月、蘭渓道隆、北條経時の室の三回忌仏事を建長寺に於て修す。	建長史・編年史編
一二五九	正元元年	開慶元年	◎参謁すること五年～四年、この頃迄にか、別山祖智に得法とみる？。其の後十四年間、諸大老に参じ、在宋十四年間。（△南浦紹明、入宋、虚堂智愚に参ず）	天童寺志・本朝高僧伝・廿一・浄慈寺之三
一二六〇	文応元年	景定元年	△九月、天童四十世別山祖智示寂、中峰菴密庵咸傑の塔右に葬す（寿六十）。 △元庵普寧禅師、博多に来航、聖福寺に入り、栄西忌日に陞座説法す。次いで建長寺二世に晋住す。	建長寺史・空華集・天童寺志・巻三（元寶等）
一二六一	弘長元年	景定一	△無関普門、浄慈寺断橋妙倫に法衣頂相授受。 ◎『空華集』に曰く「南宋景定の間、公航海南游」 △圓爾辨圓、鎌倉に赴き元庵普寧の建長寺入寺を祝う。 △建仁寺監寺禅忍、「大覚禅師語録」携え入宋、浄慈寺虚堂智愚に校勘を得る。	建長寺史・空華集十九 北條花記・上・本朝高僧伝
一二六二	弘長二	景定三	△簡翁居敬、天童四十一世晋住。 △堰渓広聞示寂（七年）。 △西厳了恵示寂（六年）。	天童寺志
一二六三	弘長三	景定四	△物初大観、大慈寺より阿育王寺四十六世に晋住。 △この頃、直叟智侃、禅忍共に大覚禅師語録を校勘後、紹興で施財し、刻版刊行する。	阿育山史・建長寺史 建長寺史・禅家史
一二六四	文永元年	景定五	△虚堂智愚、杭州浄慈寺第四十六世晋住。 ◎北條時宗、最明寺を拡大し禅興寺を構え、蘭渓道隆を招請す。 △信州の僧性憲、何時の年にか入宋し、客死す。	浄慈寺史・建長寺史 日本文化交流史

（安楽寺塔名写に曰く、樵谷十錫掛四年間、物初大観後、派を帯し、宗準無住寺天童智祖山別持）

一二六五	文永二	咸淳元年	△寒巌義尹、道元の語録を携え再度入宋し、明州瑞巌寺・杭州霊隠寺・浄慈寺を巡り序・跋をもとめる。△虚堂智愚、径山萬寿寺四十世晋住。△兀庵普寧、宋国に帰り明州に至る。△無象静照、在宋求法十四年間、帰国す。	径山寺志・建長寺史
			に諸大老に参ず 阿育王寺住持	
一二六六	文永三	咸淳二	◎この頃にか、阿育王寺物初大観会下の衆中に名を掛ける。△巨山志源、同志と共に入宋、虚堂智愚に得法。帰国後建長寺二世となる。	阿育王山志・建長寺史
一二六七	文永四	咸淳三	△南浦紹明、在宋求法九年間、虚堂智愚の餞偈を受け帰国す。	建長寺史・禅宗史
一二六八	文永五	咸淳四 蒙古至元五	◎在宋十四年にして、春（三月）、物初大観の餞偈を受け帰国とみる。「日本仙侍者帰国」分明飯布裏春風、巨船回程去海東。と、△六月、阿育王寺物初大観示寂（寿六十八）。△山叟慧雲、在宋十一年間、帰国す。▲蒙古使者、太宰府に到り国書献上。	阿育王山志・物初和尚語録、空華日用工夫集・安楽寺塔婆考
一二六九	文永六	咸淳五	△虚堂智愚、示寂（寿八十五）。◎或は、この年の春に帰国ともみる。△永嘉人、大休正念、来航し、時宗は禅興寺に招請、蘭渓道隆之を引座す。	径山志・安楽寺塔婆考・建長寺史
一二七〇	文永七	咸淳六	◉韮崎市永岳寺開創と伝える。△南浦紹明、筑前興徳寺に住す。▲蒙古船対馬に至る。朝廷返牒を鎌倉に下すも幕府は之を押う。	禅宗史・日本歴史
一二七一	文永八	咸淳七 元至元八	▲蒙古使者来航、国書を上呈、朝廷は異国降伏を祈願させる。◉朗然居士の応需、頂相に讃を加える。△日蓮、斬罪を免れ流罪さる。△七月、西澗子曇、時宗の招聘にて来航す。▲九月、鎮西将士に令し海防厳重にす。	日本歴史・建長寺史
一二七二	文永九	咸淳八	◉二月、蒙古間諜説の妄議に、時宗に無実を伝える。◎この頃にか？「信陽僊府、披榛拗宇、名曰崇福山護聖安楽禅寺」とみる。	蘭渓道隆尺牘・空華集、十九疏
一二七三	文永十	咸淳九 元至元十	▲三月、元使者趙良弼、太宰府に来航、京都に入れず退去させる。△六月、北条義政、連署就任す。◎この頃にか？、建長寺往訪、「塩田和尚至、引座普説」とみる。？△太白山天童景徳禅寺焼失。△長野長池の人、規庵祖円、西方寺無本覚心の会下に首座となる。	日本歴史・禅宗史 天童寺志 大覚禅師語録 下語説
一二七四	文永十一	咸淳十 至元十一	▲十月、「文永の役」。◎妄議に遭い甲州に配流される。尺牘に曰く、「この両三年妄議を被り両年難に罹る。」と、◎この頃、信州崇福山安楽禅寺開創とみる。蘭渓尺牘曰く「近聞再主塩田、重興宝社」と。△大休正念、禅興寺より建長寺に入寺す。	日本歴史・蘭渓道隆尺牘・建長寺史
一二七五	建治元年	徳祐元年 至元十二	▲元使杜世忠等五人、竜口に斬殺す。・△無学祖元、元軍の戦乱を避け雁蕩山能仁寺に移る。△北条義政連署就任三年目。◎この頃、（四月十五日安楽寺は）初会夏安居の修行とみる。	日本歴史・禅宗史
一二七六	建治二年	景炎元年 至元十三	◉四月十日、安楽禅寺方丈宛「蘭渓状」に曰く「六日晨を侵し、諸友と同じく貴寺（安楽寺）に往きて夏（夏安居）を過さんと。云々～建侍者等六七人、特に往きて瞻観せん、委細御尋ね有るべし。諸事申し尽くすに及ばず。	蘭渓状
一二七七	建治三	景炎二 至元十四	△連署北条義政、三十才、五月廿二日遁世逐電、塩田に籠居す。◉八月、甲州東光寺より鎌倉に帰り、寿福寺に住す。▲太宰府、南宋国滅亡により日本商船交易を中止し、逃げ帰ったことを幕府に報告をする。	関東評定伝、建治三年・建長寺史 日本歴史年表
一二七八	弘安元年	祥興元年	△春、大休正念、建長寺退院。◉何時の年か樵谷の応需観音像に加讃する。◉五月、寿福寺より建長寺に帰住し、七月廿四日示寂（寿六十六（五））	建長寺史
一二八四	弘安七	至元廿一	△四月、北条時宗歿去（寿三十四）。その三回忌に長谷に乾明山萬寿寺開創、無学祖元勧請開山。◎それ以後、萬寿寺に出世、遽爾帰郷	「鎌倉の禅寺」川副武胤著・空華集
一二八九	正応二	至元廿六	◎安楽寺国宝八角三重塔の（蛇虹梁）年代測定により、檜材伐採す。この年以後数年にして八角三重塔の建立とみる。	元興寺文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター古環境研究室
一三一三	正和二	元 皇慶二	◎樵谷惟僊示寂（寿八十五）とみる？（佛燈禅師語録、門人為樵谷和尚請拈香。樵谷の頂相造立年を十七回忌と勘案）	佛燈禅師語録 安楽寺重要文化財頂相の胎内銘による造立年月を踏まえ
一三一四	正和三	元 延祐元	△春の頃か、仏燈禅師約翁徳倹（建長寺第十五世）、樵谷惟僊の為に拈香法語す。曰く「四十餘載、名翼横飛、六十餘州、雷駈電馳、両鎮名藍弘大法」云々	
一三二九	嘉暦四年八月九日元徳元年		◎十七回忌正当？、七月、木造頂相造立（胎内銘に楞厳呪八句陀羅尼、楞厳会満散を期してか？）・九月十二日、二世恵仁頂相造立	安楽寺頂相胎内銘

建長寺六世葦航道然（信州人）・建長寺廿一世玉山徳旋（信州人）・建長寺五十三世鈍夫全快（信州東部人）。霊泉寺・龍光院・信廣寺・全芳院・向陽院・陽泰寺・龍洞院等々建長寺派寺院と伝える。東昌寺は東福寺派下、滝泉寺は無本覚心派下と伝える。

特別展覧会開催にあたり、下記の方々のご協力、ご指導を賜りました。厚く御礼申し上げます。

協力機関（五十音順）

鎌倉市教育委員会、鎌倉国宝館、建長寺、国立歴史民俗博物館、東京国立博物館、東京大学史料編纂所、安楽寺、信濃国分寺、長野県立歴史館

協力者（五十音順、敬称略）

川上元、小林康幸、齋藤愛、櫻井松夫、塩入法道、鈴木弘太、高井正俊、田中和夫、田原良平、土屋積、永井正憲、西島敏雄、馬場秀雄、原田寛、宮原友則、村上博優、若林恭英

表紙写真　左　・蘭渓道隆禅師尺牘（鎌倉時代中期・安楽寺所蔵）
右上・青磁算木文香炉（鎌倉時代後期・鎌倉市教育委員会所蔵）
右下・版木（鎌倉時代後期・鎌倉市教育委員会所蔵）

裏表紙カット　上田市塩尻地区出土常滑大壷（鎌倉時代後期・個人所蔵）

鎌倉の古代・中世文化と上田地方

平成20年9月20日発行

編集
発行　上田市立信濃国分寺資料館

〒386-0016
長野県上田市国分1125番地
電話・FAX（0268）27-8706
E-mail: kokubunji@city.ueda.nagano.jp
URL: http://museum.umic.ueda.nagano.jp/kokubunji/

印刷　田口印刷株式会社

092.193
Sh 59